

ツバキ図譜
「花くらべ」

日本の江戸時代は、珍しく平和が長く続き、その間、世界に例を見ない園芸熱の高まりによって園芸植物が発展したことを指摘する学者は多い。そうしたことを裏付けるため、江戸時代を中心とした園芸資料の蒐集を始めて30年、それなりに集まった資料のなかから「江戸時代の花たち」と題して紹介させていただく。ご覧のうえ、ご意見などあればお寄せいただきたい。

徳川2代将軍、秀忠は大変な園芸愛好家であって、「武家深秘録」（慶長18年成る）に次のような記載がある。「将軍秀忠 花癖あり 名花を諸国に徴し、これを後園吹上花壇に栽えて愛玩す 此頃より山茶（ツバキ）流行し数多の珍種を出す」

秀忠がどれほどのツバキをコレクションしたかは資料として見つからないが、江戸期のツバキ資料としては、宮内庁書陵部蔵本の「椿花図譜」を第一級の資料として、ほかにも数種類の図譜が伝えられている。

ここに紹介する「花くらべ」は、題簽並びに箱表書ともに同筆にて、「楽堂」の名がある。たぶん製作者の名であろう。残念ながら年代の記載はないが、花の図は1点1点丁寧に、しかも能筆に画かれ、全110余種すべて品種名が書き入れてあるので、他本との校合研究によって製作年代、場所など明らかになればと考えている。

いずれにしても寛文〜元禄ころの製作であろう。「楽堂」なる作者（？）についてご存じの方はご教示いただきたい。

